

団体名	NPO法人岡山NPOセンター		活動タイトル	学校を越えて地域学を支える民間機関の設立プロジェクト				
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■ 活動風景					
●望ましい社会状況(ビジョン)	<p>ビジョンは、すべての子どもが生まれ育った地域の良さやその社会システムを理解し、自らの意志で地域の中でのキャリアを見出せる社会。また、インターネット等で氾濫する情報の中で自分の軸を持ち、共助の気持ちを持てる社会である。小中高校そして大学とも連携しているソーシャルアクティブラーニングセンター（以下、SALCO）を設け、各地域で大人たちが自らの地域と仕事に誇りをもち、楽しんで暮らす中で、様々な大人や他者と接点を持ちながら子どもたちが生活している状態をめざす。</p>		<p style="text-align: center;">学生企画 実施準備風景</p> 	<p>岡山NPOセンターでのインターンシップを修了した2名が、修了後改めてボランティアとして企画立案に取り組んだ。</p>				
●団体の社会的役割(ミッション)	<p>岡山に根差し、現実の一步先の取組と仕組みづくりとして以下をめざしている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 日本における持続可能なまち（地域）運営モデルの実現 2) 互いの個性を尊重し誰もが暮らしやすい未来型コミュニティの実現 3) 市民社会の担い手と共に育ち続けられる組織としての確立。 <p>あくまで仕組みづくりが役割であり、今回も学校を越えて地域学や市民教育を支えるSALCOという仕組みをつくることで、様々なプレイヤーが学校と連携しながら、子どものために活躍できる状況をつくることを社会的役割としてめざす。</p>							
●団体の活動基盤	<ul style="list-style-type: none"> ●人材：SALCOでコーディネーターを務める兼務職員が2名程度存在する。また、SALCOに関わり、学校へコンテンツ提供を行う民間組織が複数存在する。 ●拠点：学校を越えた放課後の場としての拠点が県内3エリアに1つ以上存在する。 ●資金：地元自治体、学校、民間組織などの複数の組織・財源からの資金でSALCOの運営が維持され、SALCOを通じて、民間の寄付などを財源とした給付型の奨学金なども提供されている。 ●情報：各学校とSALCOが円滑に情報を共有するための仕組みがあると共に、子どもたち個々の体験や経験が可視化されて蓄積される仕組みがある。 							
■ 活動報告			■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)					
<p>SALCO 基本機能の構築を目標に、以下に取り組んだ。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 参加可能なプロジェクトの情報収集と提供：Lineを活用し、NPO・NGOインターンシップやイベント、県内NPOの取組紹介などの情報提供をおこなった。 2. モデルプログラムの開発(1)：SALCOの相談窓口で学生のボランティアやインターンシップ等に関する相談対応をおこなった。必要に応じてNPOに繋いだほか、学生自身が関心を寄せる社会課題や今後の市民セクターにおけるキャリアを描くための企画実施にかかる伴走支援に取り組んだ。 3. モデルプログラムの開発(2)：県内大学と協働し、NPO/NGOインターンシップに取り組んだ。2大学との協働実施が実現し、1大学とはアクティブラーニングプログラムの企画実施に向けた検討段階まで進めた。 4. 活動基盤強化：SALCOの業務に携わる兼務職員(非常勤)を1名配置した。併せて組織内の各セクションで若者の社会参画推進事業を担当する職員との共有会議を設け、支援の体制強化を図った。 			<ol style="list-style-type: none"> 1. 参加可能なプロジェクトの情報収集と提供：Line登録者数は、目標105名に対し73名(69.5%)。そのうち情報を活用したことを確認できたのは3名のみにとどまった。 2. モデルプログラムの開発(1)：学生の企画立案を支援するものとしてマッチングしたケースが6件あった。そのうち企画が完了したものは2件(4名)。完了した企画に携わった学生4名のうち、何らかの学びを得て次の行動目標を各自見つけられたのは4名（70%目標に対し100%）。 3. モデルプログラムの開発(2)：民間の力を借りたアクティブラーニング実施に対して理解している教員2名獲得という目標に対し、インターンシップを協働実施できた大学は2校(教員2名)。加えて、プログラム実施に向けて協議を進めている大学が1校(教員2名)。 4. 活動基盤強化：組織内の体制強化を図り、SALCOの仕組みについて1以上の自治体担当者が理解している状態を目指したが、組織内の体制強化に留まり行政への働きかけまで至れなかった。 			<p style="text-align: center;">岡山県立大学 ふりかえり会 風景</p> 	<p>インターンシップに参加した学生、受入団体、教員、NPO法人だっぴ。事務局によるふりかえり会。学生が学びを深めると共に団体が横の繋がりを育む機会にもなった。</p>	
■ 事業を通じて得られたノウハウ			■ 望ましい社会状況を達成するための課題					
<p>期間内にふりかえりまで実施できた県立大学のインターンシップでは、学生が修了後も継続してボランティアとして足を運ぶなど、その後の行動に繋がったケースが多かった。団体スタッフも「組織のミッションを一定伝えられた」という手応えを感じており、一定の成果を得られたと捉えている。</p> <p>成果に繋がる要素として、教員による事前の学生へのニーズ把握とそれに伴う団体とのマッチングに加え、団体側のインターンマネジメント力の高さがうかがえた。具体的なポイントとしては、学生の動機を聞きながら柔軟に活動内容を設計する力、団体独自のインターンシップ報告会等を通じた学生とスタッフ相互の意見交換により学生のみならずスタッフの学びとしても吸収する力、団体が学生に学びを提供するという姿勢ではなく事業の一端を担う存在として共に働く姿勢などが考えられる。これらは今回の取組をもとにした仮説であるため、今後さらに要点を精査していきたい。</p>			<ol style="list-style-type: none"> 1. 参加可能なプロジェクトの情報収集と提供：①文字ベースの一方通行の情報提供では、行動の促しに繋がらないことが明らかとなった。内容のさらなる見直しと共に、情報の見せ方の工夫について検討する。②双方向ツールとしての活用策を検討する。 2. モデルプログラムの開発(1)：①「企画運営の学生」「企画に参加した学生」「団体」の、それぞれの変化に対する評価方法を整理する。②取り組んだ学生と団体の変化は得られたが少数であるため、今後波及させる仕組みを検討する。 3. モデルプログラムの開発(2)：①インターン終了後の出口支援のあり方を整理する。②大学生と繋がりたいという団体ニーズに対応していくために、インターンシップやボランティア以外にも多様な受け皿（機会）をつくる。 ③団体におけるインターンマネジメントのノウハウを共有する。 4. 活動基盤強化：アクティブラーニングの一連の取組の中に、行政との接点が生まれる形を検討する。 			<p style="text-align: center;">この1年間の活動 を通じて</p>	<ol style="list-style-type: none"> ①学生の伴走支援を通じた継続的な行動への促し ②インターンマネジメントの要点確認 ③アクティブラーニングに理解を示す大学教員との連携 	<p>を達成しました。</p>
			■ 受益者の具体的な変化（自由記入）					
			<p>少数ではあるが、SALCOでの企画立案実施やインターンシップを活用した学生たちは、活動だけで終わらず、その後も、何らかの具体的な行動に一定繋がっている。また団体側は、学生と協働できる余地を見出したり、受入団体同士の横の新たな繋がりを活用するなどの変化が見られた。</p>					